

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370370

研究課題名(和文)19世紀フランスにおける文学的オリエンタリズム

研究課題名(英文)Literary Orientalism in the 19th Century France

研究代表者

畑 浩一郎 (HATA, Koichiro)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：20514574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀後半以降、西洋はオリエントという異世界を理解するためにさまざまな知的営為を積み重ねていく。本研究では19世紀のフランス文学において、こうして得られた知見がいかに関作品世界に取り込まれていくのか、またそれがどのような形で作家のインスピレーションを発動させるのかを考察した。その結果、オリエントは作家の価値観やイデオロギーを表明するためのある種のアリバイとして機能するということが、また19世紀の旅行記が「自らを語る」という自伝的性格を持つ場合があり、そのことによってフランス文学の伝統であるユマニスムの系譜に連なる潜在性を秘めているということが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：From the mid-eighteenth century onward, the West produced various discourses in order to make sense of a foreign world defined as the Orient. Focusing on French literature of the 19th century, this study's goal was to understand how newly acquired knowledge of the East was integrated into literary works as well as how it helped inspire many writers. The results of our analysis show that the representation of the Orient often becomes a mere pretense for writers to divulge their own values or ideology. Furthermore, in the case of travel writings in the 19th century, autobiographical tendencies stemming from a need to "narrate the self" created a Westernized view of the Orient. We showed that this kind of Orientalist writing illustrates a latent humanist tradition within French literature.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 19世紀 オリエンタリズム 旅行記 異郷 他者 エキゾティスム

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、フランス・ロマン主義時代のオリエント旅行記の考察を専門としているが、研究を進める中で「文学的オリエンタリズム」という新たな文学研究のアプローチがあることに気づいた。これは、1990年代のフランスで発表されたいくつかの先駆的な研究を基盤とするもので、その目的としては、18世紀以降、西洋諸国がオリエントに向けた眼差しの特殊性を、文学作品の検討を通じて明らかにしようとするものである。この手法の特性と射程を見極めつつ、それを19世紀フランス文学の作品読解に応用することで、新たな文学研究の展望を得ることができないのではないかと考えたことが、本研究の出発点にある。

2. 研究の目的

1978年に刊行されたエドワード・サイードの『オリエンタリズム』は、発表直後からさまざまな議論を巻き起こし、いわゆるポストコロニアル理論が確立する契機となった。サイードは18世紀末からフランスやイギリスを中心に芽生えた東洋学が、いかにしてオリエントを表象することに心を砕いたか、またそのことによっていかにオリエントという異世界が突きつける現実を管理可能なものに変え、西洋諸国が展開する植民地主義を理論的に支えていったのかを鋭く指摘した。東洋を理解しようとする西洋人の試みは、さまざまな領域で展開することになる。政治、経済、軍事、考古学、地勢学、民俗学、芸術などの分野で、それぞれの専門家がそれぞれのやり方で考察を積み重ね、その成果が互いに密接に影響し合っ、複雑かつ茫漠としたオリエント像が次第に醸造されていくことになる。こうして得られた知見が、19世紀のフランス文学においていかに作品世界に取り込まれていくのか、またそれがどのような形で作家のインスピレーションを発動させるのかを考

察することが本研究の目的となる。

個々の文学作品に現れる作家のオリエントに対する意識や考えを抽出し、それらを誤謬、偏見、差別的視点を含めて検討することで、当時の西洋人が抱いていた世界観をできるかぎり再構築していくこと、それが本研究の目指すところとなる。しかし注意しなければならないのは、本研究は、植民地の描かれ方や宗主国の支配の様子を文学作品の中に考察する、いわゆるポストコロニアル理論とは方向性を異にするということである。ポストコロニアル理論がさまざまな文学作品の分析を通じて、西洋中心主義的な歴史観に疑問を投げかけ、結果的にある種のイデオロギーをまとっていくのに対し、本研究は全く正反対の方向を目指す。文学的オリエンタリズムとは、作家のオリエントに対する意識を媒体にして、文学そのものの特性をあぶり出そうとする試みである。作家の価値観やイデオロギーなどがさまざまに反響する独自の磁場のような作品空間の中で、オリエントはどのような働きを果たすのか。作品創造の場におけるその作用と効果について考察を深めることが本研究の主眼となる。

3. 研究の方法

まず作家の実際の旅体験を下敷きに執筆される旅行記(シャトブリアン、ネルヴァルの作品など)を一方の軸に、また主に作家の想像力から紡ぎ出される小説や詩作品(ユゴー、バルザック、ボードレールの作品など)をもうひとつの軸におき、当時の歴史的背景、とりわけ植民地拡張政策や、言語学や民族学などの分野における学問の進歩と関連づけながら、オリエントの表象と文学の関わりについて検討していく。具体的には以下の問題を考察する。

(1) 旅行記をめくって

旅行記におけるオリエントの表象。作家の直截的な旅体験がいかにか加工されて文学作品の中に取り込まれていくか。旅行記の執筆は作家の旅体験を前提として持つが、その体験が「生の」状態で作品に移植されるということは決してない。作家は必ずある意図のもとに自らの経験を再構成していくのである。たとえばネルヴァルの『東方紀行』(1851)は、旅の体験を自らの内面を語るための一種のアリバイとしている。こうした語りの枠組みの中でオリエントはいかなる形で触媒としての役割を果たしていくのか。

オリエント旅行と文学作品創造の可能性の問題。この時代にオリエント旅行を行う作家の多くは、帰国後にその経験を素材にして旅行記執筆を行っている。しかし1849年から2年近い歳月をかけて近東諸国を周遊したフロベールは、膨大な旅日記や書簡を残す一方で、最終的に旅行記を手がけることはなかった。いかなる審美的な理由が、彼をして旅行記執筆へと向かわせなかったのだろうか。他方で彼のオリエント体験は、後年の『サランポー』(1862)や、生涯にわたって執筆を続ける『聖アントワーヌの誘惑』(1874)といった小説や戯曲作品に間接的に投影される。旅行記ではなく、こうした作品形式が彼に選ばれた理由とは何か。

(2) 小説・詩作品をめくって

19世紀に発表された小説におけるイマゴロジー的考察。たとえばバルザックの小説『あら皮』(1830)には所持者の願いを全て叶えてくれる護符が登場するが、それはオリエント起源のものとされる。西洋の常識では計れない神秘を説明するために「オリエント」という言葉を提示することで、全てが解決されるのである。こうしたイメージは時代によって、作家によって変動を見せ

る。たとえばフロベールは『感情教育』(1869)において、主人公フレデリック・モローに、パリとは異なる異国情緒に満ちた土地オリエントを夢見させているが、『紋切り型事典』(1881)ではこうしたオリエントに対する憧れそのものを、すでに手垢のついた時代遅れなものとして皮肉をもって扱っている。オリエントに対して当時のフランス社会が抱いていたイメージが、それぞれの作家の文学的営為においてどのような意味や価値を持つのかを探る。

詩作品における「祖国からの追放」(exilé)の観念とオリエント。ユゴーの『東方詩集』(1830)以来、オリエントに対する憧憬を詩作品で描き出すという手法はありふれたものになっていく。しかし1840年代から50年代以降、そこに「祖国で感じる疎外感」というテーマが重奏されていくようになる。テオフィル・ゴーチエやボードレルの作品に顕著に見られるこうした詩人の世界観を、オリエントが彼らに喚起したイメージと関連づけながら検討する。

4. 研究成果

主に次の3点の知見を得た。

(1) イデオロギー伝播の媒体としての文学旅行者のあり方。『パリからエルサレムへの旅程』(1811)はシャトーブリアンが行った聖地巡礼の旅の記録だが、作家は全集版に付した序文(1826)において、トルコからの独立戦争を戦うギリシアに対する熱狂的な支持を打ち出すことになる。それはフランスだけにとどまらず、西洋全体に巻き起こる親ギリシアの機運に一定の方向づけを与えていく。英国詩人バイロンのギリシア独立戦争への参加とミソロンギにおけるその死とはまた違った次元で、このシャトーブリアンの事例は、文学が社会に対して直接的に関与していく一例となる。

(2) 旅行記と自伝の間に引かれる境界線について。18世紀を代表する作家たちーヴォル

テール、ディドロ、ピュフォン、ルソーらが
一様に旅行記を執筆していないという事実
に着目し、19世紀になぜオリエント旅行記が
これほどの興隆を見せたのかという問題を
考察した。その結果、新時代の作家たち（シ
ャトーブリアン、ラマルチーヌ、ネルヴァル
ら）は、オリエント旅行を口実にして「自ら
を語る」という自伝的な方向に向かったこと
が確認できた。もちろんその方法と実践は作
家によってさまざまだが、このことによりオ
リエント旅行記は、フランス文学の伝統であ
るユマニスムの系譜に連なる潜在性を秘め
ているということが明らかになった。

(3)「祖国からの追放」の観念とオリエ
ント。ユゴーの『東方詩集』(1830)以来、オリ
エントは「官能」と「残虐」といった紋切
り型とともに、未知なるものに対するある
種の憧憬を持って描き出されることが通例
となる。しかし1840年代から50年代以降、
そこに「祖国において感じる疎外感」とい
う別テーマが重奏されていくようになるこ
とが、とりわけゴーチエやボードレールの
作品の読解を通して確認できた。オリエ
ントは、退屈な現実生活を代弁するフランスを対
比において浮き彫りにする鏡の役割を果た
すようになり、その表象のあり方は重層的な
ものとなっていくのである。

この他にも、ポトツキの『サラゴサ草稿』
(1810)におけるカトリック、ユダヤ教、
イスラームの描かれ方と、それらの互いの
関わり方について、また新プラトン主義的
な思想が作者独自の解釈を加えられた上で
詳述されることの意義などについて検討を
行った。

2013年10月に別府大学にて行われた日本
フランス語フランス文学会において「旅と文
学」というワークショップを開催し、コー
ディネーター兼発表者としてロマン主義時
代を代表する作家たちと旅との関わりにつ
いてさまざまな角度から考察を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計2件)

畑浩一郎、ヤン・ポトツキ『サラゴサ草
稿』における語りの中断について、『聖心
女子大学論叢』、査読なし、第128集、
2017年、3-26頁

畑浩一郎、旅行記、自伝、歴史 シャト
ーブリアン『パリからエルサレムへの旅
程』論、『聖心女子大学論叢』、査読なし、
第124集、2015年、3-26頁、
[https://u-sacred-heart.repo.nii.ac.jp/?ac
tion=pages_view_main&active_action=
repository_view_main_item_detail&ite
m_id=124&item_no=1&page_id=38&bl
ock_id=92](https://u-sacred-heart.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=124&item_no=1&page_id=38&block_id=92)

[学会発表](計1件)

畑浩一郎、「私は永遠に自分について語
る」～シャトーブリアン『パリからエル
サレムへの旅程』をめぐって～、2013
年10月27日、日本フランス語フランス
文学会 2013年度春季大会、別府大学
(大分県・別府市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

畑 浩一郎 (HATA, Koichiro)
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：20514574